巻頭言

環八・蒲田陸橋を知っていますか？
通ったことありますか？
橋の上から、景色を眺めたことはありますか？

環八（かんぱち）。正式名環状八号線は、羽田国際空港から大田区、世田谷区、杉並区、練馬区、板橋区から北区へ至る東京二三区の一番外側の環状道路です。蒲田陸橋は、ＪＲ東海道本線、京浜東北線の上にかかる環八の陸橋です。

橋の上からは、南北に線路に沿って広がる景色を眺めることができます。北方面の線路の約三〇〇メートル先には、屋上観覧車のある東急プラザと大田区区役所に挟まれた蒲田駅のホーム。その周囲には、ユザワヤやマンションやオフィスビル建ち並んでいます。南（川崎方面）に目を移すと、線路を挟んで富士通の事業所や電車庫や集合住宅、マンションを一望することができます。九〇〇メートル先には、大倉踏切が遠くに見えます。

この陸の上から、一〇〇年から八〇年くらい前にタイムスリップしてみましょう。

時代は大正から昭和初期。

蒲田駅は平屋。区役所があった右手には、松竹キネマ蒲田撮影所と高砂香料が見えます。その奥の方には京浜急行の京浜蒲田駅、帝国女子医専や鬼足袋があります。東急プラザの場所には、池上電鉄と目蒲線が走っています。南方面を振り返ると、富士通の場所には、黒澤商店の工場村。電車庫の奥の踏切あたりには大倉陶園や各務クリスタル製作所。左手の集合住宅は、新潟鉄工、三省堂印刷工場、東洋オーティスエレベーター。その奥には東京計器があります。

当時の新興産業が、多く集まっていました。その多くの産業は、「日本初」の冠をつけた新しい産業でした。

東京の場末感漂う蒲田でしたが、東西の蒲田駅前では、カフェやお店が並び撮影所の女優や俳優、監督の姿も見られます。

モボ・モガとよばれる当時の流行のファッションを身に着けた若い男女も、蒲田駅から省線に乗って銀座へ行きます。

一方、田畑や野原や池や川など自然も多く残っていました。そこは、映画の撮影場所や、小沢昭一少年の遊び場、小津安二郎が俳優たちとのキャッチボールの場にもなりました。呑川のほとりには、芹沢染色工房もありました。洋画家の東郷青児や中川紀元、小説家の坂口安吾も住んでいました。

創業者、経営者、従業員やその会社に関わる人たち、芸術家や、街の人からは、新しいものに挑戦していく熱気が、感じられます。

当時の蒲田のクリエイティブな精神に触れたときに、「蒲田モダン」の言葉が浮かんできたのでした。この言葉をきっかけとして、蒲田モダン研究会が生まれました。

この小冊子は、研究会の一〇年間の活動の記念誌です。

会員の皆さんが発表したテーマや活動、研究会への思いなど、自由に書かれたものです。

一〇〇年前の蒲田に興味をもったわたしたちの記念誌が、一〇〇年先まで地域の人たちとの架け橋になることも夢みて。

蒲田モダン研究会へ、ようこそ。

鍋谷　孝